

平成 30 年 2 月 14 日 (水)

ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 長塚圭史さん WS 構想の2日間—古典籍をひらく本のドラマ—

1、6 回目のご来館

昨日に引き続き、長塚圭史さんが来館されました。本日は、以前よりご関心をお持ちだった2つのトピック、江戸時代の歌舞伎についてのレクチャーを当館教員の山下則子教授より、古典籍の扱い方の実習を落合博志教授より行い、このプロジェクトで執筆される戯曲の構想や、3月末に行うワークショップについてお話を伺いました。

2、古典籍をひらく

長塚さんは、「ないじえる芸術共創ラボ」記者発表で行った座談会¹の時から、古典籍をひらく動作自体にドラマを感じると話しておられ、古典籍をひらくところから、その本が持っている時間軸が立ち上がるような戯曲が作れたら、と仰っていました。

長塚さんによると「演劇はフィジカルなものなので、何か創り出す時には自分が体験してみることが不可欠」とのこと。そこで本日は、古典籍の扱い方についてレクチャーを行い、実際に古典籍をひ

らく体験をしていただきました。

古典籍には大きく2つの形式があり、ひとつは卷子本(巻物)ひとつは冊子本です。

卷子本の扱いは私たち研究者にも難しく、特に、ズレをつくらず丁度良いきつさで巻き戻すのは一苦勞です。まずはその卷子本の扱いから体験していただきました。



紙が傷むのを避けるため、巻子を一気にひろげて見ることはしません。卷子本を自分の身体の正面に置き、両手を添えます。左手で新しい箇所をひらきながら右手で見た箇所を巻き取り、いつも肩幅く

¹ <http://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/symposium/index.html>

平成 30 年 2 月 14 日 (水)

らいの間隔でひろげるように注意します。

その他にも、卷子を留めていた紐が巻き込まれたりしないように結わえておく方法や、巻き戻しながらズレを直す方法など、様々なポイントがあります。



長塚さんは向かい側でお手本を示す落合博志先生（当館教授）の動作を注意深く観察しながら「ふつう卷子本は床でみるのですか？机ですか？」「メモを取りたくて手を止める時にはどうしたらいいのですか？」「冊子本はどこを持ってめくるのですか？」と質問し、実

践しておられました。

動作自体に興味があると仰っていただけあり、私たちが普段無意識に行っていることにも注意を向けておられるのが大変印象的でした。

卷子本と、様々な形態の冊子を一通り触られた長塚さん。扱いだけでなく、古典籍がどのような構造をしているのかがとてもよく分かったと仰っていました。そしてその実感は、「だれが、どのように作っているのだろう」という関心へと繋がってゆきました。

3、戯曲の構想とワークショップ

古典籍の、もうひとつの大きな分類として、写本（手書き）か版本（印刷物）かという違いがあります。

江戸時代以降、印刷技術の発達により様々な本が印刷されるようになりましたが、それまで和歌や物語は手書きで作られていました²。たとえば『源氏物語』を読みたい人は、それを持っている人から借りて写していたのです。そのためどのような紙に、どのような字で書くかということが非常に重要視されましたし、紙等の価値や手間の多さから、本は財産としても非常に大切にされてきたのです。

そこで重要になるのが、誰から借りたのかということ（伝来）です。

² 江戸時代にも写本は作られており、版本よりも価値が高いものと

された。

平成 30 年 2 月 14 日（水）

大抵由来のある本には、最後の部分に「いつ、誰が誰から借りて写したのか」という情報が書かれています。この部分を「奥書」と言いますが、こういった経緯でその本を筆写したのか、あるいはその本を作った目的のようなことも書かれていることがあります。こういった奥書を調べることで、その本が過ごしてきた時間を辿ることができます。

また、版本も多くの人の手を経て出来ています。たとえば曲亭馬琴『南総里見八犬伝』³（図 1）は、板木から刷られた印刷物ですが、作者である馬琴が原稿と絵の下書きを書き、絵師が絵の清書をし、筆耕が文字の清書をし、彫師が板木を彫り、摺師が絵の具を付けて刷り、表紙を付けて糸で綴じてから、本屋に並んだり貸本屋が扱ったりするようになるのです。



図 1

長塚さんは、写本には大事にされてきたドラマが、版本には騒々しいドラマがあると感じられたそうです。

ひとつの古典籍が自分の手元に来るまでに、誰が、どのように関わっているのか。そのことを探り、ドラマをちりばめることによって、古典籍の持っている時間軸を旅するような戯曲ができるのではないかと話してくださいました。きっとそのことは、あらゆるものが、それぞれ時間を含んでいるのだという普遍的なテーマに繋がるだろうということです。



それでは、それを戯曲の枠組みにしたときに、中身はどのようなものが良いのか。

本日、山下典子先生（当館教授）から江戸時代の演劇についてのレクチャーを受けながら、古典を演劇化する時に最も壁となるのが歌舞伎・能・狂言だと話してくださいました。古典作品の物語は抽出

³ 第一輯口絵。請求記号：ナ 4-787-1～101。

平成 30 年 2 月 14 日（水）

できても、それを動作や言葉で表現する方法が、既に確立しているからです。

そこで目を付けられたのが、ナンセンスなストーリーを持つ黄表紙でした。たとえば、作者が執筆に行き詰まっている様子を描いた、メタ的な作品や、人間の目や鼻や口を擬人化してしまう作品がありますが、こういったことは歌舞伎ではなく現代劇⁴の方が向いていると思われたそうです。

ひとつの古典籍をひらいたところから、その時間軸が立ち上がってきて、煙の向こうから黄表紙の世界が現れたら……という構想を話してくださいました。

このアイデアを形にするために、3 月末にワークショップを行います。実際に体験してみることが大切なので、肉体表現に長けたダンサーや、こういったワークショップでは不可欠なアイディアマンを呼んで来たいと仰っていました。この構想がどのように変化してゆくのか、とても楽しみです。

⁴ 長塚さんは、十八代目中村勘三郎の「歌舞伎も現代劇」という考え方を紹介し、「現代劇」という言葉を慎重に使っておられます

が、ここでは便宜上現代劇としています。